

R 7 年度 2 学期終業式式辞

251224

今年も残り一週間となりました。みなさんにとってどのような一年だったでしょうか。尼小田プライドに恥じない学校生活を送れましたでしょうか。オープンハイスクールに来校した中学生から憧れられるに値する小田校生だったでしょうか。

さて、一昨日の月曜日の 12 月 22 日は冬至でした。一年で昼が最も短く、夜が長くなる日です。冬至は別名を「一陽來復の日」と言って、冬至は太陽の力が一番弱まった日で、この日を境に再び力が蘇ると言った前向きな意味を含んだ言葉です。冬至を境に運気も上昇すると言われています。

2、3年生の皆さん、この話、昨年の2学期終業式で聞いた覚えはありませんか。個人的に年末のこの懐ただしい感じが一年の中で一番好きなので、また、未来が明るくなる感じが好きなので、それを受験生である3年生の皆さんに伝えたくて、校長になってから5年間、毎年話しています。

冬至の時期に食べる習慣があるのがカボチャです。カボチャに含まれているビタミンAやCは免疫力を高め、ウイルスの侵入を防ぐなどの働きがあります。どうか皆さん、温かいゆず湯と併用して、免疫力アップを図ってください。

さて、皆さんは「イグ・ノーベル賞」をご存じでしょうか。「イグ・ノーベル賞」は、「人を笑わせ、そして、考えさせてくれる研究」に授与される、ノーベル賞のパロディー版です。パロディーといえども、「イグ・ノーベル賞」を受賞し、その10年後にはノーベル賞を受賞した人もいるので、レベルは相当のものです。

今年の「イグ・ノーベル賞」の生物賞は、日本の児島さん達の研究チームが「しまうし」で受賞しました。この研究は、「しま模様に身体を塗った牛には、アブなどの吸血昆虫がつきにくい。」という研究です。アブなどの吸血昆虫が牛につくと、牛はストレスで乳量が減ったり、体重が増えにくくなる。伝染病にかかりやすくなる。などのリスクがあります。児島さんのところに、畜産農家から対処法はないかと相談されていたそうです。既に薬はあるけど、コストが高くかかる。低成本で対応できないかと考えて、「しまうし」を考案したそうです。

通常の黒い牛と「しまうし」で比較実験すると、「しまうし」には吸血昆虫が半分しかつかない。ほんまかいなと思いながら、2019年に論文発表し、今回の「イグ・ノーベル賞」につながったとのことです。

児島さんは今回の受賞の要因について、「こんな実験意味ないやろと言われてもおかしくない内容だったが、それが実現できたのは上司や試験場の懐が深かったことにつきる。」と話しています。

そして、「しまうし」の受賞をきっかけに、研究者を志す子どもが一人でも増えたらうれしい。「研究ってちょっと難しそうだな」って敬遠している子が、「えっ、こんなんやっていいん？面白そう」と興味を持ってくれたら素晴らしいことだと。

将来研究者を目指している子ども達には、「熱中していることを、大人達から意味がないと否定されるかも知れない。ただ、人に迷惑をかけないなら、好きなことを貫き通した方がいい。」とアドバイスをしています。その上で、「それが人の役に立つなら素晴らしい。仮に役に立たなくても構わない。転ばぬ先の杖を気にするのではなく、やりたいことにトライすべきだ。」とメッセージを送っています。

尼崎小田高校は、学校全体で探究活動に取り組んでいます。今話したような研究に出会うチャンスはきっとあります。それが本校在学中に限らず、卒業後かも知れない。社会人になってからかも知れない。チャレンジし続ける気持ちさえあれば、あなたたちの「しまうし」が必ず見つかるでしょう。

このチャレンジし続ける姿勢は、受験にも当てはまります。今まさに受験にチャレンジしている3年生の皆さん。行きたい場所を目指して夢中になってください。共通テストは24日前、個別試験ももう目の前です。受験生の皆さん、どうか最後の最後まで、高め合える仲間と一緒に、つまらない妥協をすることなく、自分を励まし、自分を鍛え、力を尽くしてください。心から応援をしています。エールを送ります。

最後になりますが、年末年始は多くの人が集まる場所へ出かける機会が増えます。事件事故に巻き込まれないように、また、感染防止対策に十分留意して下さい。その上で、家族や仲間と穏やかな時間を過ごし、1月8日の始業式には元気な姿を見せて下さい。皆さん良いお年を。